

論文審査の結果の要旨

氏名：宮 下 達 哉

博士の専攻分野の名称：博士（心理学）

論文題名：審美的価値観と絵画の美的評価との関連についての心理学的検討

審査委員：（主査） 教授 岡 隆 ㊞

（副査） 教授 羽 生 和 紀 ㊞ 教授 坂 本 真 士 ㊞

本論文は、審美的価値観が絵画に対する美的評価と関連することを一貫して示した研究である。本論文における審美的価値観とは、Spranger (1921) の提唱した6つの普遍的価値観（理論・経済・審美・宗教・社会・権力）の1つであり、美しさを重視する価値観である。また、本論文における美的評価とは、対象に対する快感情である（Berlyne, 1974）。

審美的価値観と美的評価との関連を指摘する先行研究は少なくないが、本論文は、その関連の仕方について、絵画カテゴリ化という概念を独自に導入し、審美的価値観は絵画カテゴリ化を媒介して美的評価と関連するというモデルを独自に提案している。絵画カテゴリ化とは、ある視覚対象を絵画であると判断することであり、ある視覚対象に対して絵画カテゴリ化が生じると、それが絵画であるという前提を置いた美的評価が行われる。

以上の媒介モデルに立って、本論文は、審美的価値観の高い人が低い人よりも、ある視覚対象を絵画であると判断しやすい、すなわち、絵画カテゴリ化を生じさせやすく、いったん絵画カテゴリ化を生じさせると、その視覚対象（すなわち、絵画）に対して快感情を生じさせやすいと考えている。本論文は、この考えを実証的に検討するために、①審美的価値観が絵画カテゴリ化と関連すること（研究1）、②審美的価値観が、「絵画」（すなわち、絵画カテゴリ化が生じた視覚対象）の美的評価と一貫して関連すること（研究2, 3, 4, 5, 6a, 6b）を示そうとしている。

研究1は、審美的価値観と絵画カテゴリ化との関連を検討するために、絵画カテゴリ化の測定方法を独自に工夫している。具体的には、3枚の絵画（風景画、静物画、人物画）にモザイク処理を施し、それが一見して絵画かどうか分からない視覚刺激を作成し、それに対する絵画カテゴリ化（「あなたはそれを絵画だと思いますか？」）を測定し（ $N=96$ ）、絵画カテゴリ化と審美的価値観との間に有意な正の相関を検出し、審美的価値観が高いほど、絵画カテゴリ化を生じさせやすいことを示している。

研究2から研究6bまでの6つの研究は、審美的価値観と「絵画」に対する美的評価との一貫した関連を示そうとするものであり、審美的価値観の高い人は低い人よりも、視覚対象が「絵画」でありさえすれば、①その絵画の内容にかかわらず美的評価を高くすること（研究2, 3）、②審美的価値観以外の個人差要因の影響を受けることなく美的評価を高くすること（研究4, 5, 6a, 6b）を検討しようとしている。

研究2は、絵画に描かれている内容の美醜にかかわらず、審美的価値観が高いほど、絵画というものに対する美的評価が高いかどうかを検討している。具体的には、6枚の絵画（美しい対象が描かれた絵画3枚と醜い対象が描かれた絵画3枚）に対する美的評価を測定し（ $N=89$ ）、審美的価値観の高い人は低い人よりも、絵画に描かれている内容の美醜にかかわらず、絵画に対する美的評価が高いことを示している。

研究3は、抽象画であるか具象画であるかにかかわらず、審美的価値観が高いほど、絵画というものに対する美的評価が高いかどうかを検討している。具体的には、6枚の絵画（抽象画3枚と具象画3枚）に対する美的評価を測定し（ $N=96$ ）、審美的価値観の高い人は低い人よりも、抽象画であるか具象画であるかにかかわらず、絵画に対する美的評価が高いことを示している。

研究4は、既知性の程度、すなわち、その絵画を知っているかどうかにかかわらず、審美的価値観が高いほど、絵画というものに対する美的評価が高いかどうかを検討している。具体的には、研究3と同

じ 6 枚の絵画に対する美的評価と、それぞれの絵画に対する既知性（「あなたはその絵画を観たことがありますか？」）を測定し（ $N=79$ ）、審美的価値観が高い人は低い人よりも、絵画に対する既知性の高低とはかかわりなく、絵画に対する美的評価が高いことを示している。

研究 5 は、美術経験の多寡にかかわらず、審美的価値観が高いほど、絵画というものに対する美的評価が高いかどうかを検討している。具体的には、美大生（ $N=140$ ）と一般学生（ $N=96$ ）を対象に、研究 2 と同じ 6 枚の絵画に対する美的評価を測定し、美大生であるかどうかにかかわらず、審美的価値観が高い人は低い人よりも、抽象画および具象画に対する美的評価が高いことを示している。

研究 6 は、絵画に対する美的評価との関連が指摘されてきたパーソナリティ特性のひとつである「開放性」の高低にかかわらず、審美的価値観が高いほど、絵画というものに対する美的評価が高いかどうかを検討している。具体的には、多様な性質の 24 枚の絵画を刺激として呈示し、これらの絵画に対する美的評価と、開放性を測定し（研究 6a, $N=110$ ；研究 6b, $N=323$ ）、研究 2 から研究 5 までとは異なる多様な絵画刺激に関しても、複数のサンプルで、審美的価値観が高い人は低い人よりも、開放性というパーソナリティ特性の高低にかかわらず、絵画に対する美的評価が高いことを示している。

以上、研究 2 から研究 6b までの 6 つの研究は、審美的価値観の高い人は低い人よりも、絵画というものに対して、①その絵画の内容にかかわらず美的評価を高くすることと、②審美的価値観以外の個人差要因の影響を受けることなく美的評価を高くすること示している。

本論文は以上のように、7 つの実証的な研究を通して、審美的価値観の高い人が低い人よりも、ある視覚対象を絵画であると判断しやすい、すなわち、絵画カテゴリ化を生じさせやすく、いったん絵画カテゴリ化を生じさせると、その視覚対象（すなわち、絵画）に対して快感情を生じさせやすいことを明らかにしてきたと主張している。これまでの先行研究が、審美的価値観と美的評価との直接的関係を検討してきたのに対して、絵画カテゴリ化という概念を、審美的価値観と美的評価とを媒介する概念として独自に導入し、その測定・操作方法を工夫していることは高く評価できる。また、本論文が、これらの実証的研究を通して、審美的価値観と美的評価との関連について、今後解決されなければならない多くの課題を提示していることは、この研究分野の今後の研究を刺激している点で高く評価できる。これらの課題のいくつかは、①本論文は、絵画カテゴリ化の媒介過程に関して間接的な証拠しか得ておらず、今後、より直接的な検証のための研究方法の改善・開発が必要であること、②本論文は、Spranger の提案する 6 つの価値観のうち審美的価値観にだけ焦点を当て、それだけを取り上げているが、価値観は複数の価値の葛藤のなかでの選択・行動の基準となるという側面を考慮すると、審美的価値観以外の価値観との関係性を考慮に入れた研究が必要であること、③審美的価値観と美的評価との関連には、本論文が主張するような絵画カテゴリ化を媒介とした間接的な関連だけでなく、先行研究が指摘してきた直接的な関連もあり、それら間接的な関連と直接的な関連のそれぞれの性質やそれらの関係についての検討が必要であること、④本論文は、絵画に対する美的評価について、快感情のみに焦点を当てているが、たとえば、感覚・感情の水準での評価や高度な認知の水準での評価など、美的評価の多層・多重性や多面性を考慮に入れる必要があることなどである。

以上の成果は、知覚心理学、認知心理学、感情心理学、社会心理学が輻輳するこの複合的研究領域における学識の深さと新しい心理科学的研究を遂行する能力の高さを示すものであり、申請者が専門的な職務に従事するための十分な資格を有していると判断される。

よって本論文は、博士（心理学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

平成 年 月 日